

哲学的問い：『直接に与えられるもの』一節の最後のところ (p27) に出てきた「真の『時』は人格的でなければならぬ」とはどういうことであるのか。

その問いを解くために p25 より p27 まで再読した。

感覚と思惟との関係

思惟することに感覚が必要であるが、単に感覚からは思惟の作用を生じないので、感覚とは意識内容の限定せられたものである。つまり、意識は感覚内にあるのではなく、感覚は意識内にあるのである。

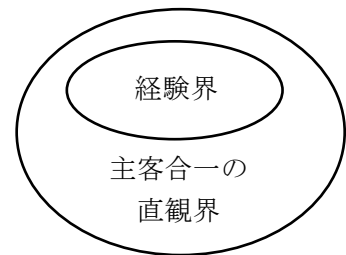
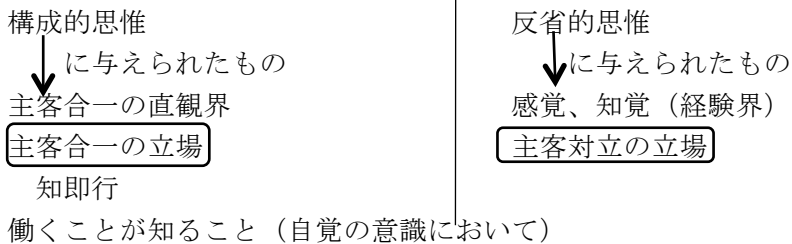
逆に、意識を限定せられたものだとすれば、意識の背後には意識を包む超意識がなければならない。そして、佐野先生は岡村方式で文章に出てきた重要な言葉を整理された。以下のように示されている。

主客合一の立場 超意識界 直観 直接経験、純粹経験 対象化することのできない自己 直接の所与 行為的主観、働く自己 真の我 行為と結合した我 精神的実在 真の時 人格的 (時は我によって限定せられている)	主客対立の立場 所謂意識界 構成せられたもの 単に見る我、考えられた我、思惟的我 考えられた主観 知的主観 無内容なる時 単なる座標 (我は時によって限定せられている)
--	---

次に、時はただ固定される形式・座標であるのか、それとも各々の生物にはそれなりの時間を持っているような具体的・個人的なものであるのかという問いをめぐって、議論があった。

本文要約

『直接に与えられるもの』の二節 p27 より p29 「又未来を見るものでなければならぬ」まで読了。続いて、岡村方式で文章を整理した。



1. ようするに、西田は二節に新カント派からの反論を予想し、それらの反論に対して反論しようとしている。
 - ①主客合一の直観界は「問なき肯定」の立場の対象界ではなく、これを包むものである。
 - ②主客合一の立場は自覚の意識において意識し得る或いは分かる (知即行) ののである。
 - ③「所与の範疇」は思惟より高次の立場・直観の立場において成立する、しかもこの立場より包まれるのである。

2. 想起：直観したもの・意識から消えさったものを記憶に保存して、後に意識の中に呼び起こす思惟作用。
 *現実の背後に超現実的なものが含まれていて、過去の意識と現在の意識を結合し統一する超時間的意識がある。

哲学的問い：

文章における「包む」と「含む」との区別は何であろう。例えば、p13、「構成的思惟の内容を内に含んだもの」「直接に与えられたる経験の中に含まれたる関係」、p21、「既にその中に含まれたるもの」「この作用の立場を包む」p23、「却って之を包んだもの」、p26、「超意識界を含んだもの」、p28、「かかる立場を包むもの」…